

トマス・アクィナス『天使祝詞講解』—翻訳と註釈—

Thomas Aquinas' 'In Salutationem Angelicam vulgo "Ave Maria., Expositio'

— Translatio et Commentaria —

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

トマス・アクィナスのマリア論は、一面においては、マリアの権威は神の母としてのものであり、したがってキリストのゆえにマリアは偉大であるとするものであるとされ、他面においては、マリアに独立の人格としての意義を認めるものであると論じられる。

『天使祝詞講解』（以下『講解』）におけるトマスのマリア論も、上記の両面を有するが、マリアに独立の人格としての意義をより認めるものであると言える。『神学大全』Summa Theologiae および『神学綱要』Compendium Theologiaeにおけるトマスのマリア論が、理論上だけでなく構成上も、キリスト論の一部を構成する議論と位置づけられているのに対し、『講解』においてはマリアが独立の主題となっている。

本稿は『講解』のマリア論の上述した独自性に着目し、トマスのマリア論に別の角度から光を当てることを試みるものである。方法としては、『講解』の翻訳と註釈を交互に提示する。この作業を通じて、『講解』がマリアについてのどのような考察であるかを浮かび上がらせることが、本稿の目標である。

テキストとしては、In Salutationem Angelicam vulgo "Ave Maria., Expositio, in: S. Thomae Aquinatis Doctoris Angeli Opuscula Theologica, vol.II., De Re Spirituali, cura et studio P. Fr. Raymundi M. Spiazzi O. P., Marietti, 1954, pp.237-241を用いた。マリエッティ版の神学小品集第2巻は、収録する全著作の節に通し番号を振っており、翻訳中の節番号は1110番から開始する。

この訳は、訳者の知るかぎり初の日本語訳である。

Key Words : トマス・アクィナス, 祈り, マリア論, マリアの主体性

1.1 翻訳

天使祝詞 *salutatio angeli*, 一般には「アヴェ・マリア」と呼び習わされている祈り, 講解

1110 この祈りには、3つのことが含まれている。1つの部分は、天使がこれを作った。すなわち、「アヴェ、恵みに満ちた方、主はあなたと共におられます。あなたは女のうちに祝福され」¹。さらなる部分は、洗礼者ヨハネの母、エリザベトが作った。すなわち、「あなたの胎の実りは祝福された」²。3つ目の部分は教会が付け加えた³。すなわち、「マリア」。すなわち、天使は「アヴェ、

「マリア」とは言わず、「アヴェ、恵みに満ちた方」と言った。そしてこの名、すなわち、マリアは、その〔教会の〕解釈によれば、天使が言ったことに相応しい。〔天使も〕そう感じるだろう。

1.2 註釈

『講解』で論じられているのはカトリック教会の伝統的な祈りの1つであるアヴェ・マリアの祈りである。天使祝詞とは、この祈りのラテン語での名称の1つ *salutatio angeli* の訳である。*salutatio angeli* を直訳するなら天使のあいさつとなるが、天使祝詞は、すなわち、天使の祝福の言葉という意味であり、トマスはまさしくこの祈りの一部が、天使のマリアに対する祝福の言葉から成っていると述べる。

1.2.1.1 問題点1

しかしながら、アヴェ・マリアの祈りの全文は以下のとおりである。「アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、主はあなたとともにおられます。あなたは女のうちに祝福され、あなたの胎の実り⁴ イエスも祝福されています。神の母聖マリア、わたしたち罪びとのために、今も、死を迎える時も、お祈りください。アーメン」⁵。

この全文に対し、上記1.1の翻訳から再構成したアヴェ・マリアの祈りは、「アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、主はあなたと共におられます。あなたは女のうちに祝福され、あなたの胎の実りも祝福されました」というものである。先に挙げた全文と比較すれば分かるように、トマスが『講解』で論じているのは、今日一般のカトリック信者がアヴェ・マリアの祈りとして理解している祈りの前半部のみであり、「神の母聖マリア～」以下が含まれていない。これは中世にこの祈りが成立した時、まず前半部のみが祈りとして成立し、後に後半部が付け足されたという経緯によると考えられる。

1.2.1.2 問題点2

トマスが指摘している通り、「アヴェ、恵みに満ちた方、主はあなたと共におられます。あなたは女のうちに祝福され」のうち、「アヴェ、恵みに満ちた方、主はあなたと共におられます」は、『ルカによる福音書』1章28節に見られる、天使がマリアを祝福した言葉である。しかしながら、「あなたは女のうちに祝福され」の部分はトマスの指摘と相違し、現行聖書における天使の祝福の言葉には含まれていない。「あなたは女のうちに祝福され」は現行聖書では同書1章42節に見られる、エリザベトがマリアを賛美した言葉に含まれる文言である。

1.2.2 まとめ

上述のごとく問題点はあるが、どのように理解しても、トマスが、アヴェ・マリアの祈りを、聖書に根拠を持つ、天使とエリザベトからの、マリアへの賛美のことばから成る祈りであると論じているのは確かである。聖書にはない「マリア」という呼びかけの語を、トマスは、教会の教

導権による付加としているが、付加した理由を、「マリアは、その〔教会の〕解釈によれば、天使が言ったことに相応しい」としている。すなわち、天使のマリアに対する祝福には、マリアという呼びかけが当然含まれているものとトマスは解釈していると理解することができる。

『講解』のこの箇所から、トマスにとって、現行アヴェ・マリアの祈りの前半部は、マリアへの賛美の言葉であるという解釈が可能になる。そして、議論を先取りして言うなら、『講解』は、以下、マリアがいかに賛美に値する存在であるか、すなわちどのような点で偉大なのかを論じていく。

2.1. 翻訳

「アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、主はあなたと共におられます」

1111 そして、1つ目のことに関して、考えなければならないのは、天使が人間に現れるということ、あるいは人間が彼らに畏敬の念を表すということは、古代では極めて重大なことだった。〔人間たちは畏敬を〕最大の賛美と見なしてきた。それゆえに、アブラハムによる賛美についてこう記されている。〔彼は〕天使たちを迎え入れて歓待し、彼らに畏敬の念をはっきりと示した⁶。また、天使たちが人間に畏敬の念を表すということは、決して耳にされたことはない。至福なる乙女に挨拶し、畏敬の念をもって「アヴェ」と言った後にならなければ。

1112 また、古代に、天使は人間を畏敬せず、人間が天使を畏敬していた理由は、天使は人間より偉大だったからであり、これは3つのことに関してそうだったのである。

第1には、尊厳に関して〔天使は人間より偉大だった〕。その理由は、天使は霊的な存在の1つである。「天使をその霊としているお方」（『詩編』13編4節）。しかし、人間は可滅的存在の1つである。それゆえ、アブラハムは「私は私の主に申し上げる。私は塵、私は灰なのですから」と（『創世記』第18章第27節）。それゆえに、霊的で不可滅の被造物が畏敬の念を可滅的なものに、すなわち人間にはっきりと示すということはなかった。

第2には、神への親しさに関して〔天使は人間より偉大だった〕。すなわち、天使は、手伝うものであることで、神に親しい。「何千の何千倍も彼らは彼に仕えていた。10万の何万倍も彼を手伝っていた」。しかし、人間は神の外にあるものであり、罪のために神から遠ざけられているものである。「私は逃げるものを遠ざけた」（『詩編』54〔55〕編8節）。それゆえに、人間が天使を畏敬することは、王に近い者や親しい者を畏敬する場合と同じく適切である。

第3には、神の恵みの輝きに満ちていたために卓越していた〔だから天使は人間より偉大だった〕。すなわち、天使たちは、神の光そのものに、最高度に豊かに与かっている。「彼〔神〕には多くの軍勢があるが、その上に彼〔神〕の光が上らないようなことがあるのか」（『ヨブ記』25章3節）。そしてそれゆえ、〔天使は〕常に光と共に現れる。しかし、人間は、たとえ、まさに恵みの光に何らかのことで与かるとしても、それでも極めて乏しいものであり、ある種の暗さのうちでのことである。

2.2 註釈

天使は、人間よりも神に近い存在であり、人間が天使に敬意を表すべきであって、人間が天使から敬意を表されるということは通常ではありえない。2.1に訳出した箇所では、天使がどのような点で人間より偉大であるかが論じられる。すなわち、以下の3点の理由から天使は人間より偉大である。①人間は身体を有する、いずれ滅び去る存在であるのに対して、天使は霊であり、不滅である。②天使は人間より神に近い、すなわち人間より神に近い。③天使は人間よりも神の恵みを受けている。

3.1 翻訳

1113 それゆえに、〔天使が〕人間に畏敬の念を表する、すなわち誰か、この3点に関して天使たちを超えている者が、人類のうちに見出されたからこそ、畏敬の念を表すると言うということはなかった。そして、このような女性こそ、至福なる乙女である。そしてそれゆえに、〔乙女が〕この3点で彼〔天使〕を超えていたということを表すために、彼女に対して天使は、畏敬の念をはっきり示そうとした。それゆえにこう言ったのである。「アヴェ」と。

1114 a) それゆえに、至福なる乙女は天使たちをこれら3つの点で超えた。

まず第1には、恵みに満ちていたことで〔天使たちを超えた〕。これは、どの天使よりも、至福なる乙女の身に起きた。そしてそれゆえに、このことを浸透させるために、天使は彼女に畏敬の念をはっきりと示して、こう言った。「恵みに満ちた方」と。これはあたかもこう言ったかのようである。「だから、私はあなたに畏敬の念を表明します。私を超えて恵みに満ちておられるがゆえに」。

1115 また、至福なる乙女は、3つのことに関して恵みに満ちていると言われている。

第1には、靈魂のことにに関して〔恵みに満ちている〕。〔至福なる乙女は〕この〔靈魂の〕うちであらゆる恵みに満たされていた。すなわち、神の恵みが与えられるのは2つのことのためである。すなわち、善をなすことと、悪を避けることと。そして、この2つのことに関して、最も完全な恵みを得ていたのが至福なる乙女である。すなわち、この方こそ、すべての罪を、キリスト以後のどの聖人にも勝って避けておられた。すなわち、罪にはあるいは原罪というものもあり、そして、〔至福なる乙女は〕これからは胎の中で清められていた。あるいは大罪、あるいは小罪というものもあるが、〔至福なる乙女は〕これらから自由であった。それゆえに、「あなたはまったく美しい。我が恋人よ。あなたには染みがない」とある（『雅歌』4章7節）。

アウグスティヌスの『自然と恵みとについて』の本によれば、「聖なる乙女マリアを除いて、すべての聖人と聖女は、ここ〔この世〕に生きていた時、罪がなかったかと問い詰められたとしたら、みな声を1つにしてこう叫んでいただろう。「私たちには罪はないと私たちが言ったとしたら、私たちは自らを欺いている。そして、私たちのうちに真実はない。この聖なる乙女を除くと、彼女について、主の名誉のためにあえて私は言う。罪について論じる時、本当の意味で問うているのではない（至福なる乙女に罪がないのは、教会の権威によって明らかであるので）。

すなわち、私たちは知っている。あらゆる面から罪を打ち負かすために、より多くの恵みが、いかなる罪を犯すこともなかった方を宿し、生むのに値した方に委ねられただろうことを。

1116 しかし、キリストは至福なる乙女を、原罪なくして宿り、生まれたことで超えている。至福なる乙女は、原罪のうちで宿り、原罪なくして生まれたからである。彼女はまた、すべての徳の業を実行したが、他の聖人たちはそのうちのあるものども、特定のものだけを実行した。ある者は謙遜であり、ある者は貞潔であり、ある者は憐れみ深いというように。そしてそれゆえに、彼らは特定の徳の模範とされる。至福なるニコラスが憐れみ深さの模範であるように。しかし、至福なる乙女は、すべての徳の模範である。すなわち、あなたは彼女のうちに、謙遜の模範を見出す。「ご覧下さい。〔私は〕主の端女です」、そしてその後「〔神は〕卑しい端女を顧みられた」（『ルカによる福音』1章38節、48節）。また貞潔の模範を見出す。「私は男を知りませんが」（『ルカによる福音』1章34節）。またすべての徳の模範を見出すのだが、十分明らかであろう。それゆえに、至福なる乙女は恵みに満ちており、それは善を行なうことと、悪を避けることに関するものである。

3.2 註釈

天使が、不滅性、神への近さ、恵みの3点で人間より偉大であるなら、天使がマリアに敬意を表したのは、この3点に関してマリアが天使より優れていたからに他ならない。3.1に訳出した箇所では、マリアが、アヴェ・マリアの祈りにある通り「恵みに満ちた方」、すなわち、天使よりも優れて恵みを受けていた者であることが論じられる。

トマスは、ここでは、恵みが「善をなすことと、悪を避けること」⁷に関して与えられるとする。そして、以下の4.1、5.1の翻訳にあるように、恵みはまず靈魂に満ち、そして靈魂から身体へとあふれ、ほかの人間たちにあふれ出していく。

上記の靈魂の充満の手順に従うなら、まず靈魂においてマリアは、悪を避け、善をなすという恵みを最大度に受けたとされる。それゆえに、マリアは、原罪からは、胎内の時点ですでに清められており、かつ、大罪と小罪とからは自由であったとされ、また、聖人たちが特定の徳の模範であるのに対して、マリアはすべての徳の模範であったとされる。

ここでトマスは、原罪からは清められていると述べ、そして大罪と小罪とからは自由であったとして、区別している。

現在のカトリック教会は、マリアがイエスと同じく、原罪なくして聖祖母アンナの胎内に宿ったということを教義として信じている。これを無原罪の御宿りという。無原罪の御宿りが、教義として宣言されたのは19世紀であり、トマスが生きていた時はまだ議論の対象であった。トマスはこの箇所だけでなく『神学大全』でも一貫して、無原罪の御宿りを認めていない。その理由は、マリアもまたイエスによる救済の対象であり、したがって原罪があったというものである。それゆえに、上記3.1の翻訳中でも、「キリストは至福なる乙女を、原罪なくして宿り、生まれたことで超えている。至福なる乙女は、原罪のうちで宿り、原罪なくして生まれたから」と述べられている。

3.3 翻訳

1117 第2には、靈魂が肉あるいは体へとあふれ出ているがゆえに恵みに満ちている。すなわち、聖人たちの場合に偉大な仕方で起きることだが、恵みを有するということは、靈魂を聖なるものとするということである。しかるに、至福なる乙女の靈魂は〔恵みに〕満ちており、それから肉へと恵みを流れ出させた。それ〔至福なる乙女の肉〕に神の子を宿すためにも、そしてそれゆえ、サン・ヴィクトルのフーゴが言っているように、「その心のうちには、聖靈の愛が並外れて輝き出していたので、その肉のうちでも、そこから神と人とが生まれるという驚くべきことをなした。「あなたから、聖なるものがお生まれになるでしょう。そして神の子と呼ばれるでしょう」(『ルカによる福音』1章35節)。

1118 第3には、すべての人間に流れ出ているということに関して恵みに満ちている。すなわち、どの聖人のうちでも、恵みを有して多くの人の救いに十分なものとなるほどであるという時、偉大なものがある。しかるに、世界のすべての人の救いに十分なほど〔恵みを〕有する時、これこそ最も偉大である。そしてこれはキリストのうちで、そして至福なる乙女のうちで起きる。すなわち、すべての危険に際し、あなたは、この栄光ある乙女からの救いを得ることができる。それゆえに、「千の盾(すなわち、危険に対する救済策)は彼女に懸かっている」(『雅歌』4章4節)。同じく、徳の業すべてのうちで、あなたは彼女を援助として有することができる。そしてそれゆえ、彼女はこう言っている。「私のうちは、命と徳へのあらゆる希望がある」(『コヘレトの言葉』24章25節)。

それゆえ、彼女は恵みに満ちており、天使たちを超えて恵みに満ちている。そしてこのことゆえに、「彼のうちで照らされた女」と解釈されるマリアという名で呼ばれるのは相応しい。それゆえに、「あなたの魂を輝きで満たすだろう」、そして「他の人々を照らす女性が」(『イザヤ書』58章2節)、すなわち世界全体に関する限りで。そしてそれゆえに、太陽と月に同一化されている⁸。

3.4 註釈

靈魂から身体へという恵みが伝播する順序は、『神学綱要』Compendium Theologiaeでも言及されている。そこでは、上記4.1と同じく靈魂の聖化が論じられており、そして靈魂を通して身体もまた聖化されると述べられる⁹。この身体の聖化は、キリストの受肉に関連付けられている。すなわち、マリアは靈魂だけでなく身体も、キリストがそこから肉体を得るのにふさわしく聖化されていた、ということである。

そして、他の人々への恵みの伝播の範囲は、キリストと同じく、すべての人の救いに十分なほどである。

3.5 まとめ—恵みに関するマリアの優越について—

以上の考察から、トマスは次のようにしてマリアが恵みに関して天使に優っていることを論じようとしていると解釈できる。すなわち、マリアは靈魂に恵みを受け、恵みは身体にあふれ、そ

して他の人間にまであふれ出すが、靈魂が子なる神であるキリストに次いで完全に罪から解放され、身体の聖化は子なる神がそこから受肉するほど完全であり、そして、マリアから恵みがあふれる範囲は、子なる神キリストと同じくすべての人類に及ぶことになった。子なる神であるキリストに次いで恵みを受けるということは、他のすべての被造物に優って恵みを受けるということであり、したがって、マリアはキリストの母であるがゆえに、恵みに関して、天使よりも偉大であるということになる。

4.1 翻訳

1119 b) 第2には、[至福なる乙女は] 天使たちを、神と家族であることで超えている。そしてそれゆえに、このことを表して天使はこう言った。「主はあなたとともに」と。あたかもこう言うかのように。「私は、あなたに畏敬の念を表明します。あなたが、私よりも神に親しいゆえに」、すなわち「主があなたとともにおられます」がゆえに。

父なる主は、同一の子と共にあると言われる。このことはどのような天使にも、どの被造物にもない。「すなわち、あなたから聖なるものが生まれ、神の子と呼ばれるだろう」ということは(『ルカによる福音』1章35節)。

子なる主は胎のうちにある。「大いに喜びほめよ、シオンに住むものよ。あなたの真ん中に偉大なる、聖なるイスラエルがある」(『イザヤ書』7章6節)。それゆえに、主が至福なる乙女と共にあることと、天使と共にあることは別のことである。彼女とは、子として共にあり、天使とは主として共にあるからである。

聖霊なる主は、たとえば神殿のうちにある。それゆえに、こう言われる。「主の神殿、聖霊の聖堂」と。聖霊によって宿したからである。すなわち「聖霊があなたに現れるだろう」(『ルカによる福音』1章35節)。

それゆえに、神には、天使よりも至福なる乙女のほうがより親しい。彼女と共に、父なる主、子なる主、聖霊なる主、すなわち全三位一体があるからである。そしてそれゆえ、彼女についてはこう歌われる。「全三位一体の高貴な食堂」と。

また、この「主はあなたと共に」という言葉は、自ら言われ得る最も高貴な言葉である。それゆえ、天使が至福なる乙女を畏敬するのは正当である。主の母であり、ゆえに主¹⁰であるから。それゆえに、このマリアという名は彼女に相応しい。これはシリア語で「主」と解釈される¹¹。

4.2 註釈

聖霊によって、子なる神を宿したがゆえに、マリアは子なる神とも聖霊なる神とも家族であり、そして、子なるキリストに対して母マリアは、父なる神と同じく親子関係にあるということ、父なる神にも最も親しい家族である¹²。家族関係と比べるなら、天使は神と主従関係にあるにすぎない。それゆえに、マリアはキリストの母であるがゆえに、神との近さに関しても、天使より偉大だということになる。

5.1 翻訳

1120 c) 3つ目には、〔至福なる乙女は〕天使を、清らかさに関する限りで、超えている。至福なる乙女は、自分自身が清いだけでなく、他の人々にまで清らかであるよう世話を焼いた。なぜなら、過ちに関しても、最も清らかな女性だったからである。乙女その人こそ、死すべき罪も、赦される罪も犯さなかった方である。また罰に関しても同じ〔く最も清らか〕だった。

1121 以上のことは、3つの呪いが、罪のために人間に与えられたからのことである。

まず、女に対して〔呪いが〕与えられた。すなわち、滅びと共に〔子を〕宿し、労苦して〔子をお腹で〕運ぶようにということが。しかし、このことを至福なる乙女は免れていた。滅びなくして〔子を〕宿し、慰めのうちに〔子をお腹で〕運んだ。そして、喜びのうちに救い主を生んだ。「生むものは、讚美にあふれた者として、かつ褒め称える者として生むだろう」（『イザヤ書』第35章第2節）。

1122 2つ目のものは人間に与えられた。すなわち、顔を汗まみれにして、そのパンを得るようにということが。このことを至福なる乙女は免れていた。使徒が言うように、救われた乙女たちは、この世の心配から離れており、神にのみ専心しているからである（『コリントの教会への手紙 一』第7章¹³）。

1123 3つ目のものは男と女に共通している。すなわち、塵に返るようにということは。そして、このことを至福なる乙女は免れていた。なぜなら、ある時、その体が天に上げられたのだから¹⁴。すなわち、私たちは信じる。死の後に再び目覚められ、天に運ばれたということ。「主よ、あなたの平安に上がりたまえ。あなたの聖化の櫃も〔共に〕」（『詩編』131〔132〕編8節¹⁵）。

5.2 註釈

ここでマリアの清らかさと述べられていることがらは、すでに述べた恵みとも、天使の不滅性と対応している。1120節で、マリアの清らかさについて、他者にも及ぶ開放性と、罪、過ち、罰からの完全な解放が言及されているが、これは恵みによる罪からの解放と、マリアの受けた恵みが全人類に及ぶこととに対応している。罰からの解放は、1121節以下の呪いからの自由と裏表である。この呪いには①女への生みの苦しみの呪い、②人間への生きるための労苦の呪い、③死ぬという呪いの3つがあるとトマスは述べる。これらは原罪に対する罰として与えられた呪いである¹⁶。しかし、マリアは罪から完全に自由であったがゆえに、呪いのいずれからも自由だった。

以上の考察を踏まえるなら、トマスは次のように考えていると解釈することができる。すなわち、マリアは、子なる神キリストに次いで完全に恵みを受けているがゆえに、死、すなわち滅びからの自由に関しても、それだけ完全であった、と。

ささいなことだが、ここでマリアが「自分自身が清いだけでなく、他の人々にまで清らかであるよう世話を焼いた」と述べていることにも注意を喚起しておきたい。ここでトマスは、子なる神キリストのゆえに受けた恵みを広めようとするマリアの主体性に言及している。このことは、マリアがトマスにとって、キリストが聖性を発揮するための単なる中継地点ではないということを示唆している。

5.3 翻訳

「あなたは女のうちに祝福され」

1124 以上のように、〔至福なる乙女は〕すべての呪いを免れていた。だから「女のうちに祝福され」たということになる。彼女こそただ1人、呪いを取り除き、祝福を運び、楽園の門を開いたからである。だから彼女には、「マリア」という名は相応しい。これは、海の星と解釈されるからである。海の星によって航海者たちが港に導かれるように、キリスト者もマリアによって栄光に導かれるからである¹⁷。

5.4 註釈

「女のうちに祝福され」たと賛美されているのは、女が1つ余計の被った呪いのすべてを免れていたがゆえと解釈されていると思われる。

そして、1119節と同じく、マリアという名について解釈されるが、『カテナ・アウレア』でトマスが引用しているベーダの解釈は、マリアを海の星と解する時、救いの光である主を世にもたらした「光源」であるという側面を挙げている¹⁸が、『講解』ではマリアを海の星と解する際、船乗りが星を目印に航海するように、マリアが神の栄光へと人々を導くということに言及している。このことと1116節の「しかし、至福なる乙女は、すべての徳の模範である」とを思い合わせる時、マリアは神の子を生んだ母としてこの世に光をもたらしただけでなく、マリア自身が、人間が栄光へと向かうための生き方を示しているということを、『講解』においてトマスが語るうとしていると理解される。すなわち、5.2での考察と対応し、これもまたマリアの主体性に言及するものと考えられるだろう。

6.1 翻訳

「あなたの胎の実りも祝福されています」

1125 罪人は、時に、なんらかのものに求めたことが、彼には達成することができないが、これを義人が達成するということがある。「義人によって、罪人の財産は管理される」（『箴言』13章22節）。そのように、エヴァは実りを求め、そして、それに彼女が求めたことを何も見出さなかったが、至福なる乙女がその実りに、エヴァの求めたすべてを見出したのである。

1126 すなわち、エヴァはその実りによって、3つのことを〔得ることを〕欲した。1つ目は、悪魔が彼女に偽って約束したこと、すなわち、神のように、善と悪を知るものとなることである。「あなたたちは神のようになるだろう」（と、かの嘘つきは言うのだ）。『創世記』3章5節で言われているように。そして、彼が嘘をついたのは、嘘つきであり、その〔嘘つきの〕父だからである。すなわち、エヴァは実りを食べても、神と似たものにならず、似ていないものになった。罪を犯すことで、彼女の幸福をもたらす神から遠ざかったからである。それゆえ、楽園からも追い

出された。しかし、このこと〔神に似たものとなること〕を至福なる乙女と、すべてのキリスト者とは、その〔至福なる乙女の〕胎の実り〔キリスト〕に見出している。キリストによって私たちは、神に結び付けられ、似させられるからである。「彼が現れる時、私たちは彼に似たものとなる。私たちは彼を、あるがままに見るだろうから」(『ヨハネの手紙』3章2節)。

エヴァがその実りに求めた2つ目のこととは、快樂である。〔その実りは〕食べるによかったからである。しかし、〔エヴァは食べた実りのうちに〕見出さなかった。突然自分が裸であることを知り、苦痛を得たからである。しかし、乙女の実りに、私たちは甘美さと救いを見出す。「私の肉を食べる者は永遠の命を得る」(『ヨハネによる福音』6章55節)。

3つ目には、エヴァの実りは見た目に美しかったが、乙女のそれはさらに美しい。彼に見入りたいと天使たちが欲するほどである。「〔彼は〕姿が人の子らに比して美しい」(『詩編』44〔45〕編3節)。そして、こうであるのは、父の栄光の輝きがあるからである。

ゆえに、エヴァがその実りに見出すことができなかつたものとは、またどのような罪人も、罪のうちに見出すことができなかつたものである。そしてそれゆえ、私たちが欲するものを、私たちは乙女の実りに求めるべきである。

1127 そして、この実りは神に祝福されている。すなわち、神は、彼をすべての恵みで満たし、〔恵みが〕私たちにまで、彼〔キリスト〕に畏敬の念を表明することで至るほどである。「神、または私たちの主イエス・キリストの父は、祝福されている」、すなわち、天使たちによって。「彼〔神〕は私たちを、キリストのうちで、すべての霊的祝福で祝福された」(『エフェソの信徒への手紙』1章3節)。「祝福と清澄さと知恵と恵みの行ない、名誉と力と勇気は私たちの神にある」、すなわち人間たちによって(『ヨハネの黙示録』7章12節)。使徒によれば、「すべての舌は告白する、主イエス・キリストは父なる神の栄光のうちにあると」(『フィリピの信徒への手紙』2章11節)。「主の名によりて来るものは祝福されている」(『詩編』117〔118〕編26節)。

以上のように、乙女は祝福されているが、しかしまたその実りはなおも祝福されている。

6.2 註釈

ここでトマスは、原罪をもたらした禁断の木の実と、マリアの胎の実りであるキリストとを対比している。エヴァが悪魔に欺かれて原罪を犯し、罰として呪いを被ったことに言及している。そして、エヴァがその際に求めたことがキリストによって与えられたと述べている。このことは、エヴァが神に似た者となることを求めたことは悪ではなかったということを示唆する。そして、「エヴァがその実り〔禁断の木の実〕に見出すことができなかつたものとは、またどのような罪人も、罪のうちに見出すことができなかつたものである。そしてそれゆえ、私たちが欲するものを、私たちは乙女の実り〔キリスト〕に求めるべきである」とまで言われている。

罪人も、おのれのためには善いことと思って罪を犯すが、本当に自分にとって善いこと、すなわち、自分が本当に求めているものは、決して罪からは手に入らない。そうではなくて、キリストにそれを求めるべきである。神はキリストを恵みで満たし、キリストからすべての人に恵みが

及ぶのであるから。しかし、ここでトマスは「乙女は祝福されているが、しかしまたその実りはなおも祝福されている」とし、キリストを乙女の実りと表現している。

7 解説

『講解』は、まず、アヴェ・マリアの祈り（の前半部）がマリアを賛美する言葉であることに言及し、そして、マリアが天使からも賛美されるに値する者であるのはなぜかについて語る。

マリアは恵みと神への近さとに関して天使より偉大であり、それゆえにマリアは天使から敬意を表される存在なのである。そして、この恵みの完全さ、および天使以上の神への近さは、キリストの母であることに由来する。キリストの母であるがゆえに、マリアはキリストに次いで完全に恵みに満たされ、そしてキリストは、原罪の初め以来、人間が誤った仕方でもめてきた、人間が本当に求めているものをもたらず実りと呼ばれる。この乙女の実りと乙女マリアを通して、神の恵みは全人類に及ぶのである。

マリアは、単にこの世にキリストの救いがもたらされる中継地点ではなく、キリストによる恵みの伝播に際し、主体性を発揮することが『講解』では示唆されている。トマスは、マリアが、すべての徳の模範であることに触れ、かつ、マリアの名が海の星を意味することを解釈する際、他の著作とは異なり、単なる光源ではなく、海路を示す導きの星として説明する。そして、自分が清いだけでなく、他者をも清めようと世話する存在であるということにも言及する。『講解』は研究者トマスによるものではなく、説教者トマスによるものであるとのことだが、学者としての思索の底に常にあったであろう、信仰者トマスのマリアに対する姿勢と愛が垣間見えるとっては言い過ぎであろうか。

註

- 1 『ルカによる福音書』 1章28節. ただし, 後述のとおり「あなたは女のうちに祝福され」の部分は, 現行聖書の当該箇所では上掲箇所, すなわち天使のあいさつには含まれていない。「あなたは女のうちに祝福され」は現行聖書では同書 1章42節のエリザベトによる賛美に含まれる文言である.
- 2 『ルカによる福音書』 1章42節. ただし註 1 参照.
- 3 聖書の記述には文言上含まれていないが, 教会教導権によって定められた文言であるという意味.
- 4 本稿でのアヴェ・マリアの祈りの訳文は, 筆者による試訳であり, 日本のカトリック教会における公式の口語訳とは異なる.
日本の司教団が2011年6月14日に承認した公式の口語訳は以下のとおりである。「アヴェ, マリア, 恵みに満ちた方, 主はあなたとともにおられます. あなたは女のうちに祝福され, ご胎内の御子イエスも祝福されています. 神の母聖マリア, わたしたち罪びとのために, 今も, 死を迎える時も, お祈りください. アーメン」. 公式口語訳における「ご胎内の御子」という語句の原語は *fructus ventris tui* であり, 本稿の翻訳での「あなたの胎の実り」という訳語は, この直訳である. 『講解』でトマスは, エヴァが悪魔に騙されて食した, いわゆる禁断の木の実という実りが死をもたらしたということと, イエスというマリアの胎の実りが救いをもたらすこととを対比している. ゆえに, 上述のとおり直訳した.
- 5 参考までに, 現在通用している, いわゆるアヴェ・マリアの祈りの全文のラテン語原文を以下に挙げる. *Ave maria, gratia plena, Dominus tecum, benedicta tu in mulieribus et benedictus fructus ventris tui Jesu. Santa Maria, mater Dei, ora pro nobis peccatoribus nunc et in hora mortis nostrae. Amen.*
- 6 『創世記』 3章1～7節.
- 7 1115節参照.
- 8 『ヨハネの黙示録』 12章1節.
- 9 Cf. *Compendium Theologiae*, I, c.224.
- 10 ここで主と訳した語は *Domina* すなわち主 (女性形) あるいは女主人である.
- 11 ここで主と訳した語は *Domina* すなわち主 (女性形) あるいは女主人である. なお, 『カテナ・アウレア』の第1部「マタイ福音書講解」でトマスは, ベーダが『ルカによる福音書』1章3節に付した解釈を引いてきている. すなわち, *Interpretatur autem Maria stella maris hebraice, domina syriace, quia et lucem salutis et Dominum mundo edidit.* 「マリアは, ヘブライ語では海の星, シリア語では女主人と解される. 救いの光も, 主も, 世にもたらしたからである」. また, 『カテナ・アウレア』第3部「ルカ福音書講解」で同じくベーダを引用している. すなわち, *Maria hebraice stella maris syriace vero domina vocatur; et merito: quia et totius mundi Dominum, et lucem saeculis meruit generare perennem.* 「ヘブライ語で海の星, またシ

リア語で女主人を、マリアと呼ぶ。それはふさわしいことでもある。全世界の主を生むことにも、救いの変わらない光を生むことにも値する方だったからである」。この2つの引用には meritum という語が出ているか否かという違いがあるが、マリアの名前についてのマリアの理解がベータに依拠するのは間違いない。

12 Cf. Compendium Theologiae, I, c.212.

13 32節～34節.

14 聖母の被昇天が教義として最終的に宣言されたのは20世紀のことであるが、ここではすでに聖母の被昇天への信仰が語られている。

15 『詩編』における詩各編の番号は、箇所によって新共同訳聖書とウルガタ訳聖書でずれがある。テキストにはウルガタ訳聖書の編番号が記されているが、カッコ内に新共同訳聖書の編番号を記した。

16 『創世記』3章16～19節.

17 註12参照.

18 註12参照.